

【一般演題4】 第20席 『甲乙経』における経穴主治症の経脈別分布状況に関する研究

大阪 武中 一郎

鍼灸病証学の確立にとって『甲乙経』を初めとする『明堂経』を引く種々の経穴書に記載された経穴主治症の分析は必要不可欠のものであり、その主治証の経脈別分布状況を調査することにはある一定の意義を有するものと考えられる。

なぜならば、ある経脈に特異的に出現する主治症を発見することができた場合、その主治症はその経脈を診断する上で重要な鑑別症状とみなすことができ、さらに一歩進めてその経脈中に含まれる各経穴の主治症の鑑別の特異性を明らかにすることができれば、その特異的主治症は治療穴の選択上重要な鑑別点となり得るからである。

このような検討を緻密に行っていけば、将来的には従来の切診や望診などの主観的診断法のみならず、病証診断に基づく治療体系を構築することも可能となるであろう。

しかし一口に分析と言っても、今回取り上げる『甲乙経』一つをとってもその主治症データは膨大であり、多角的分析を行うことは容易ではない。

そこで一昨年よりコンピューターを使用して経穴主治症をデータベース化する試みに取り組んで来た。改良すべき余地はまだ十分にあるものの、より多角的な分析が可能となるように汎用性のあるデータベースを設計した。これにより複数項目からの複合的な検索、並替え、集計などの処理が迅速かつ正確に行えることから、従来よりも容易にしかもより多角的で複雑な分析が可能となると考える。

今回は初歩的な研究ではあるが、この「甲乙経経穴主治症データベース」を使用して主要な主治病証を抽出し、その件数を経脈別に集計してグラフ化することにより経脈別分布状況の調査・分析を行った。それより得られた興味深い結果を紹介すると同時に考察を加えたい。